

学内広報

2018.2.22

no. 1507



雪に覆われた安田講堂前（1月24日）



全ての構成員が個人として尊重される大学になるための

東大ハラスメントQ&A

学生アスリート、指導者、国会議員によるパネルディスカッション

大学スポーツの活性化に向けて

全ての構成員が個人として尊重される大学になるための

東大ハラスメントQ&A



ハラスメントのないキャンパスを実現するために2001年から開設されているハラスメント相談所が、全学の教職員に知っておいてほしいポイントを選び、Q&Aの形にまとめてくれました。学生に対して教員が持つパワーの大きさ、構成員の雇用形態や文化背景の多様さといった特徴を持つ知の拠点において、大切な仲間を無意識のうちに傷つけたりしないよう、ご一読ください。

Q.1-3 ➡ セクシュアル
Q.4-7 ➡ アカデミック
Q.8-11 ➡ パワー
ハラスメント

Q セクハラがつもりがないことを明確にしておけば相手が不快に感じてセクハラにはならない。○か×か？

A ×/セクハラは、言動をした側の意思表示や認識に関わらず、受け手がその言動を性的に不快だと感じた時に成立します。

Q 職場においてセクハラにあたらないものはどれか？

- ①壁にアイドルの水着姿のカレンダーが貼ってある
- ②自分のロッカー内にアイドルの水着写真を保管している
- ③休憩時間に仲間と性的話題で盛り上がる
- ④デスクのPCのスクリーンセーバーがアイドルの水着写真

A ②/言動が特定の相手に向いていなくても、セクハラが容認されるような環境により、言動を見聞きした人の就業・修学環境が不快になる場合は、「環境型セクシュアルハラスメント」にあたります。デスク上でも、他人の目につく空間での性的な掲示物は不快感を与える可能性が大。性的な雑談、半裸になる宴会会なども、不快になる人がいた場合、環境型セクシュアルハラスメントにあたります。

Q セクシュアルマイノリティに関する記述で正しいのは？

- ①この世には男か女か2つの性別しか存在しない
- ②同性愛はごく限られたケースであり、身近には滅多にない
- ③タレントがネタにしているし、軽いノリで扱っても大丈夫
- ④友人から「ゲイだ」と告白されたら他の友人にも情報共有する
- ⑤宿泊行事で個室を用意する、健康診断の時間を分けるなど、特別扱いをしすぎるのは不公平だ
- ⑥セクシュアルマイノリティだと伝えられたら、隠すよう助言し、ゼミ合宿や職場の慰安旅行も参加しないよう提案すべきだ

A すべて×(正しいものはない) /
①性的指向のみならず、生物学的な身体特徴も二元論では分けられないという認識が広がっています。性自認 (gender identity) と身体的な性 (sex) が必ずしも一致しないことは多くの症例からも明らかです。
②博報堂LGBT総合研究所が2016年に実施した調査によると、日本のセクシュアルマイノリティの割合は8% (13人に1人) です。
③TVの芸人がセクシュアルマイノリティの代表なわけではありません。また、「ホモ」「オネエ系」等の呼称が不快に思われることもあります。
④性的指向のカミングアウト、また、いつ誰にどう伝えるかは、本人に決定権があり、勝手に他人へ伝えること (アウトティング) は人権侵害となります。信頼して伝えてくれた友人に確認することが大事です。
⑤セクシュアルマイノリティであることで起こり得る不都合について対応や配慮をするのは「特別扱い」ではなく、当事者のQOL (生活の質) を守る意味でも大切です。
⑥性のあり方を隠すかオープンにするかは自分で決めること。宿泊行事の捉え方も一人一人違います。どんな工夫や配慮が必要か一緒に考えることが望ましいでしょう。



(参考) 平成29年1月1日より「事業主が職場における性的言動に起因する問題に関して雇用管理上講ずべき措置についての指針 (セクハラ指針)」が改正され、「被害を受けた者の性的指向又は性自認にかかわらず、当該者に対する職場におけるセクシュアルハラスメントも、本指針の対象となる」の一文が加わりました。これにより、セクシュアルマイノリティへの差別的言動もセクハラ指針の対象であることが、あらためて明確になりました。

Q たびたびゼミに遅刻する学生がいる。教育的指導として皆の前で叱責し、1回につき罰金500円を払うよう命じた。この対応は○か×か？

A ×/教育的指導を行うのは間違いではありませんが、皆の前で叱責したり、罰金を科したりするのは「見せしめ」の意味が強く、アカハラになる可能性があります。懲罰を科すのではなく、どうしたら遅刻をしないか、具体的にあと〇〇分早く来て欲しい等の行動修正の提案をして教育的指導を行うのが望ましい手段です。

Q 勉学は手取り足取りでは力が伸びないので、学生に論文指導を依頼されたら3回は「忙しい」と断わっている。そこで諦めない学生は伸びるので優秀な学生の選抜も兼ねられ、一石二鳥だ。この対応は○か×か？

A ×/大学には修学環境を保全する義務があります。教員が妥当な理由なく学生の指導を行わないことは「アカデミックネグレクト (指導放棄)」であり、アカハラになる可能性があります。時間が取れない場合には「今は難しいが〇日ではどうか」と具体的に別の機会を提示し、教育を受ける権利を保障することが大切です。

Q ゼミ発表担当の学生が、冗長な説明をしてなかなか進まない。対応として望ましいものはどれか？

- ①その場に居てはイライラするので、無言で部屋を出て行く
- ②「簡潔にまとめろ。ちゃんと準備したのか」と叱責する
- ③「仕切り直したいので一旦休憩しましょう」と声をかけて休憩し、説明をもう少し端的にできないか等、学生と検討する
- ④大きなため息をついて腕組みし、時計をチラチラ見る、などの態度で時間がかかりすぎていることをほめかす

A ③/イライラをそのまま学生にぶつけてはアカハラになる可能性があります。一度休憩を入れ、リフレッシュして再開することを勧めます。
①アカデミックネグレクトになる可能性があります。②「準備をサボった」という一方的な決めつけの可能性があります。教員側が期待する到達度や達成課題が正確に伝わっていないことも考えられます。一方的な叱責の前に学生の理解度の確認を。④態度で意図が伝わると疑問。大切なことは冷静に言葉で伝えましょう。

Q 研究室の助教が休みがち。学生から居所を聞かれることも多い。責任者の対応として正しいのはどれか？

- ①「無断欠勤が学生に悪影響を与えている。次のミーティングで謝罪と納得いく説明を皆にするように」と助教に指示。
- ②「最近休みがちですね。実験室にも来ていないようで心配です。折り返しの連絡だけでももらえますか」と助教に連絡。
- ③助教以外のスタッフと学生を集めて「彼は外します。引継ぎや指導教員変更を行うので安心して下さい」と方針を周知。
- ④無断欠勤をする非常識な人間を構う暇はないので、放置。

A ②/まずは安否確認の目的で連絡を取ることが肝心です。理由等は安否が確認されてから、徐々に尋ねましょう。①欠席の理由は研究室員間での事柄かもしれない、人に知られたくない事情かもしれません。プライベートに配慮した環境で確かめるべきです。③本人確認なしに職務から外すのはアカハラにあたる場合があります。④安否が心配です。メールや電話に反応がないなら、家に様子を見に行く、同居家族に連絡を取るといった対応を行うべきかもしれません。

Q 派遣会社から派遣されている非常勤職員が東京大学の構成員からハラスメントを受けた場合、対応を行う責任はどこにあるか？

- ① 派遣会社
- ② 東京大学
- ③ 派遣会社と東京大学の双方

A ③／派遣労働者が派遣先でセクハラを受けた場合、労働者派遣法第47条の2により、派遣会社と派遣先の双方に男女雇用機会均等法の「職場における性的な言動に起因する問題に関する雇用管理上の措置（第11条第1項）」が適用され、派遣先にも使用者としての義務が発生します。また、パワハラを受けた場合にも、労働安全衛生法第71条の2「労働者の快適な職場環境を形成する事業主の努力義務」が適用され、解決のために措置を講じる責任が双方に発生します。

Q 着任したばかりのスタッフが、床への直置き厳禁の化学薬品が入った段ボールを床にドサッと置いたため、教員が思わず「何やってんだ！床置き厳禁だ！」と大声で注意した。これはパワハラになる？ ならない？

A ならない／化学薬品の取扱いは命の危険を伴うことがあり、重大な危険を回避する目的で大声を出すのは必要な行為といえます。「怒鳴ったら即パワハラ」ではなく、「言動に妥当性や相当性が認められるか否か」が分かれ目です。ただし、段ボールに「床置き厳禁」を明記する、段ボールに保管したまま放置せず、薬品名を明記して適切な保管場所にしまう、などの対処で危険を回避できた可能性もあります。研究室の環境を見直し、改善する方向につなげましょう。

Q 副課長がいつも書類提出期限を守らない部下に「なぜ遅れるんだ。期限を守るのは常識だろう」と叱責したら、部下が「この前 A さんが遅れたときは何も言わなかったのに私だけ責めるなんてパワハラだ！」と逆ギレ。副課長の叱責はパワハラになる？ ならない？

A ならない／期限を守らせるための叱責は業務上必要な指導であり、それだけでパワハラとはいえません。ただし、「本当にお前はダメだ」と人格を否定したり、「もう来なくていい」などと雇用不安を生じさせるような発言が伴うと、パワハラになる場合もあります。また、期日のある仕事を順序立てて処理できない特性を持つ人もいます。その場合には、期日までの具体的な作業の優先順位をつけて指示する、仕事を依頼する伝え方を工夫するなどで改善することがあります。

Q 係長の A が評価面談時に「部下 B の執拗なメール攻撃に参ってしまい仕事手がつかない」と相談してきた。部下 B は「こんなやり方はあり得ない」などと A 係長に長文メールで改善要求をしているらしい。以下で正しいものはどれか？

- ① 長文メールを送り続けるだけではパワハラにならない
- ② B は A の部下であるためパワハラは成立しない
- ③ B を呼び出し上司として A への態度を改めるよう注意する
- ④ どの程度参っているかわからないので専門の医療機関を受診するよう勧める

A ④／心身の不調は見た目ではわからないことも多いため、一度専門の医療機関へつなぎ、診断してもらうことが重要です。本学には本郷・柏保健センターに教職員外来、各キャンパスに産業医相談窓口がありますので、ぜひご利用ください。①攻撃的な長文メールを受け取り続けることは精神的に大きな負担となる場合もあり、心身の健康を損ねたり、業務に支障が出た場合にはパワハラになる可能性があります。②パワハラは、職場内の優位性に基づき、適正な範囲を超えて精神的・身体的苦痛を与えたりする言動を指します。職場内での優位性は、職務上の地位だけでなく、経験年数や専門スキル、職場内の人間関係など様々な要素に基づくため、部下→上司や同僚同士でもハラスメントは起こり得ます。③いきなり注意してはBの反発を買い、A係長への言動がエスカレートすることも考えられます。まずは中立的な立場でBの言い分も聞きましょう。Bの考えにも一定の理解を示しつつ、どういう方法が望ましいか一緒に考え、行動の修正を具体的に促すような指導が必要です。

～ここからはいちょうくんがハラにゃんに質問しました～



ハラメント相談所に相談するとどうなるの？
ボクの悩みも聞いてくれるの…？

相談員は常に相談者の立場に立って話を伺い、問題の解決に向けてともに考え、提案をしたり、問題の整理を手伝ったりします。どんな解決を得られるかは場合により様々。相談者の意思確認をしながら進めていきます。相談の流れについては下図をご参照ください。



相談してみたい時はどうすればいいの？ 予約？
相談員ってどんな人？ ネットじゃないよね？

まずはメールか電話で問い合わせてください。臨床心理士や精神保健福祉士等の資格を有する相談員が対応し、蓄積した経験を元に提案をしながら、いっしょに解決を目指します。英語による対応が可能な相談員もいますので、お問い合わせください。



メールや電話でも相談に乗ってくれる？ 面談だけ？

面談が基本ですが、地方の附属施設在勤、海外留学中など、来所が難しい場合には、メールや電話での相談も行います。所属キャンパスの相談室に行きにくい場合、別キャンパスの相談室を利用することもできますよ。なお、相談室は本郷・駒場・柏にあります。



パンフレットで見たんだけど
部局や上司への『対応依頼』ってなんなの？

職場や研究環境の調整・改善について、相談者の希望がある場合、相談員が相談者の上司や部局の責任者（専攻長・研究科長・所長等）に相談者が抱えている困りごとや希望を届け、対応をお願いすることです。



相談したことが職場や上司に知られることはない？
プライバシーは守られるの…？

相談の秘密は絶対に守ります。相談所の利用や相談内容が相談者の許可なく外に伝えられることも、所属先に利用が通知されるシステムもありません（ハラメント相談所はどの部局にも属しません）。安心してご相談ください。



大学におけるハラメント防止
～教職員のための模擬事例集～

ハラメントを防止するためのアイテムを教職員に配付中

ハラメント相談所では、これまで対応してきた経験をより一般化した形に整理し、模擬的な事例集冊子として、教職員に配布しています。←この模擬事例集（2017年3月発行の改訂版）の他にも、ポスター、和文リーフレット・英文リーフレット、スクリーンセーバーなど、ハラメントを防止するためのアイテムを多数用意しています（目印はハラにゃん）。ご希望の方は依頼書をダウンロードして提出ください。

➡ har.u-tokyo.ac.jp/leaflet/
研修のご依頼もお待ちしております。

➡ har.u-tokyo.ac.jp/prevention/
相談・問い合わせ

➡ soudan@har.u-tokyo.ac.jp
➡ 03-5841-2233（内線22233）

学生アスリート、指導者、国会議員によるパネルディスカッション

大学スポーツの活性化



溝口紀子さん / 司会
全日本柔道連盟評議員・パルセ
ロナ五輪女子柔道銀メダリスト

浜田一志さん
硬式野球部監督

宮台康平さん
硬式野球部・法学部4年

近藤秀一さん
陸上運動部・工学部3年

溝口□さて、東大ブランドが通用しないスポーツの世界で結果を残す選手がなぜ現れたのでしょうか。ご本人に聞いてみたいと思います。

宮台●硬式野球部は幸運なことに東京六大学野球連盟に属しています。高校時代に進学校で野球をやっていた人間にはなかなか経験できない舞台です。甲子園で活躍したような人たちと真剣勝負できたことが、自分を成長させてくれました。彼らがいたから負けたくないと思ってがんばれたし、プロ野球という次の舞台に挑戦したいとも思わせてくれました。

溝口□東大法学部を卒業すれば、弁護士になったり、一流企業への就職もできます。東大ブランドを捨ててまで挑戦したのは……？

漠然とした夢が現実的な目標に

宮台●野球を始めた頃からプロ野球は漠然とした夢の舞台でした。大学で野球に打ち込み、プロが夢というより現実的な目標になったときに、やはり挑戦したいと思ったんです。東大というものを抜きに、一人の人間として目標に挑戦したい、と。神宮は自分たちにはレベルが高い舞台で、なかなか勝てず、どうしてここでやっているんだろう、と思うこともありましたが、努力し続けた結果、勝つ喜びも味わえました。非常にいい経験ができました。

溝口□先日、近藤選手が部屋で一人キムチ鍋をつつく姿をテレビで拝見しました。他大の選手は寮で用意された食事ですね。こうした環境で上を目指すのは大変じゃないですか。

近藤◆私は学業とスポーツの間に壁をつくらないようにしています。一つのことを突き詰め

るという点が共通していると思うのです。たとえば、受験で求められるのは、まずどの大学に入るかという明確な目標を定め、そのためにどの問題集をいつまでにやるか、というふうには、目標から逆算して考えることです。これは陸上競技でも同じ。大会でどういう結果を出すかという目標を定め、そこから逆算して、いつまでにどういう練習をこなすかを考える。学問は真理を追究しますが、陸上競技も、月に何キロ走る、朝何時に起きてどう練習する、という固定観念を捨て、強くなるには何が必要かという真理を探究するもの。学業とスポーツの狭間で苦勞する感覚はあまりありません。

溝口□食事とかマッサージとか、支える人がいたらもっと記録が伸びるとは思いませんか。

近藤◆なんでもプラスに捉えています。ただ、客観的にみると、東大では設備などの面で至らない部分があるとは思いますが。そこは大学全体として取り組むべきで、個々の意志が強ければいいという話ではないと思います。

八田◇こうした環境下で近藤君みたいに伸びる人もいるけど、途中であきらめてしまう人のほうが普通でしょうね。これだけ冷静に競技を極めようとしている人はまれだと思います。

溝口□浜田監督、六大学の他大と比べると東大の環境はどうですか。

浜田◇劣る面は確かにあります。ただ、我々の目標は、10戦10勝ではなくて目の前の試合で一つ勝つこと。目前の1試合に全力で集中できるのが唯一の強みです。連敗中は、勝つためには勝つという成功体験が必要という、泥沼状況でした。そんななかで宮台選手が入学

してきて、彼を軸にチームをつくれればいける、と確信しました。そこで、監督の仕事は試合の采配より環境を整備することだと割り切り、いいコーチを呼ぶとか、部員の食事を拡充させるといったことに集中しました。

溝口□野球では試合が平日にすれこむこともあるし、理系の近藤さんには実験がありますね。両立は大丈夫なんでしょうか。

宮台●月曜や火曜に試合が入ると、授業を欠席せざるをえない部員も出てきます。もちろん公欠にはなりません。学業に影響するという見方もできるかもしれませんが。

近藤◆私は週3回実験があり、休むと単位が認定されないで、調整はやはり必要です。箱根駅伝に出る他大の選手はいま頃あたりの土地で合宿して練習していますが、自分は12月27日まで授業があります。心の中で認めないようにしていますが、現実として、遅れをとっているという思いは正直あります。

溝口□やはり大変ですね……。さて、三沢さん。アメフト部は、人とお金という意味で、少し特別なマネジメントをしているようですね。

勉強とスポーツは同等の教育活動

三沢△私は、大学における勉強とスポーツは同等の教育活動だと思います。学生生活の後、はるかに長い人生が待っていて、大学はその準備期間。ではいままあるスポーツ環境は教育に適したものかという、疑問です。アメフトでは激しい接触が多く、重篤な事故が起きる可能性があります。しかし、教育である以上、事故で死ぬなんてあってはならない。なので、

※上記は抄録です。言葉は適宜省略されている場合があります。

に向けて

昨年12月21日、スポーツ先端科学研究拠点のシンポジウム「学生アスリートへの科学的サポートと大学スポーツの活性化に向けて」が伊藤謝恩ホールで開催されました。拠点教員による研究紹介、境田正樹理事による日本版NCAA構想の講演に続いて行われたのは、年末年始に話題を集めた東大生アスリート、彼らと運動部を見守ってきた指導者、オリンピック・メダリスト、国会議員という皆さんによるパネルディスカッション。その模様をダイジェストでお届けします。



八田秀雄
総合文化研究科教授
陸上運動部部長 ◆

薬師寺みちよさん
参議院議員 ▼

三沢英生さん
アメリカンフットボール部監督 ▲

お金をかけて安全対策を徹底しています。他にも環境整備にはお金をかけています。自分の所属する会社から6000万円を出し、寄附金も8000万円ほど集めました。ただ、課外活動であり、部が任意団体である以上、限界があります。安全面での責任の所在も明らかではない。本来なら大学がリスク管理をしないとイケないと思います。アメリカの大学は、スポーツを起点に寄附金を集め、それを元に大学全体を盛り上げています。それが境田理事の話したNCAA構想の本質です。大学がスポーツで改革する決意を持つことが、学生アスリート、ひいては大学全体の利益になります。

浜田○野球の場合、学生野球憲章があって、基本的に儲けてはイケないことになっているのが現状です。しかし、NCAAという大きな枠組みがあるなら、環境整備、スチューデントファーストに役立つことができるでしょう。

八田◆陸上部は最近グラウンド改修のために寄附金を5000万円集めました。本来は大学がやるべきことかと思えます。陸上競技は金が集まりませんが、箱根駅伝は別で、沿道に100万人をこえる人が集まります。走った選手にスポンサーがつくこともあり得る。シンポジウムの場などとおして、選手の姿勢を多くの人に知ってもらい意味は大きいと思います。

溝口□私は柔道部と練習しているんですが、七徳堂は毎日使えません。何千万円も集める部がある一方、場所を確保するのが大変な部もあります。日本版NCAAができると零細な部も救済してもらえるでしょうか。

三沢▲アメリカの場合、スクールブランディ

ングが進んで全体の収益が増えた結果、零細なクラブはもちろん、人気クラブへの配分額も増えました。要するに、全体のパイが大きくなれば個々のクラブの配分は増えるわけです。

東大生の活躍が国の姿を変える!?

溝口□スポーツ議員連盟の薬師寺さん、国の動きはいかがでしょうか。

薬師寺▼スポーツ基本法に基づき、超党派で第二期のスポーツ基本計画を策定しました。計画にこめたのは、スポーツで人生を変え、社会を変え、世界とつながり、未来をつくろうということ。これは2020年のオリンピックで目にする姿でもあります。NCAA構想が根付かないと、2020年でスポーツの熱がさめてしまうかもしれない。いましっかりした土台をつくらないとイケません。スポーツ科学で培われた成果は国民の健康増進に役立ちます。

次の社会をつくると思えば投資に納められる。多くの人にそうしてもらいたいですね。

溝口□東大アスリートの活躍が東大の在り方だけでなく国のスポーツの姿も変えようとしていると感じます。その潮流にいるお二人。今後にかける思いなどありましたら。

宮台●自分はプロ野球界では特殊な存在でしょうし、どこでも東大出身の選手と見られるでしょう。そこでしっかりした結果を残せば、勉強とスポーツのどちらかを捨てなくていいんだと思ってもらえるはず。プロで結果を残し、そうした影響を及ぼしたいと思います。

近藤◆自分は時間がないからこそ高強度の科学的トレーニングに取り組みましたが、強豪校にももっと勉強したい選手はいるはず。東大から僕や宮台さんのような選手が出て、科学を用いて短時間で結果を出すスタイルが広がれば、余った時間で学問にもうちこむ学生が増えるでしょう。そんな流れを在学中に発信していきたいと考えています。

溝口□スポーツ選手は脳みそが筋肉だとかいわれたこともあります。本当は知性主義ですね。では最後に、この1年と来年への意気込みを1字で色紙に表してもらいましょう。

宮台●自分は「北」です。今年の漢字に乗ってみたい (笑)。今後は、北の大地で活躍する姿をお見せします。

近藤◆僕は「順」です。計画どおり順調にきたのと、本郷に移って環境の変化に順応できたので。この字にブレイクの意味は含まれてないので、あと1年の東大生活のなかで本当のブレイクを果たせるようがんばります。

溝口□この色紙をオークションに出すという支援金になるかもしれませんが、それはまたの機会に……。本日はありがとうございました。



応援に駆けつけたイチ公に促されてポーズをとる2人。

ひょうたん島通信

大槌発! 第42回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬萊島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。



北限のウミガメたち

福岡拓也 大気海洋研究所 海洋生命科学部門
行動生態計測分野 博士研究員

ひょうたん島通信第10回（2012年発行/1439号）に大槌でのウミガメ調査復活を目指して博士研究員とともに送り込まれた新入大学院生がいました。彼はその後、地元漁師をはじめ多くの人々に助けられながら三陸へやってくるウミガメの生態研究を進め、昨年3月に博士号を取得しました。そして、博士研究員となった今も、大槌でウミガメ調査の日々を過ごしています。そう、私とその時の新入大学院生です。

2012年の調査再開以降、地元漁師の協力によって震災前と同様に毎年40～50頭のアカウミガメと10～15頭のアオウミガメが手に入るようになりました。そして、震災前から行なっているバイオリギング研究（動物に小型の記録計を装着して行動を調べる手法）によって、大槌を含む三陸沿岸域にやってくるウミガメの生態が徐々にわかってきました。

従来、アカウミガメは海底でウニや貝などの底生生物を食べていると考えられていました。しかし、甲羅にビデオカメラを取り付けて野生下での行動を撮影してみると、海底で餌を食べる映像はほと

んどなく、大半は中層でクラゲなどゼラチン状の生物を食べていました。また、従来は植物食とされてきたアオウミガメでも、海藻に加えてクラゲやサルバといったゼラチン状の生物も食べる雑食だとわかりました。大量発生して網を壊すなど厄介者扱いされるクラゲですが、消化しやすいその体は大槌へやってくるウミガメ類にとって重要な栄養源なのかもしれません。

また、ビデオ映像には本来餌ではないレジ袋などの海洋ゴミを飲み込んでしまうシーンも数多くありました。飲み込んだゴミが腸に詰まってウミガメが死ぬという話を聞いたことがある人も多いかと思えます。しかし、ウミガメのフンを調べてみると、こうしたゴミのほとんどが排泄されていました。さらに、ビデオ映像では鳥の羽や木片なども飲み込んでい

ました。つまり、ウミガメは口に入るものならとりあえず何でも飲み込んで、消化できるものは自らの栄養にし、消化できないものは排出するという戦略で生き延びてきたのだらうと推察しています。この他にも、夏にやってきたウミガメは冬には500km以上南の海域で越冬するなど、ウミガメの生息域としては高緯度に位置する大槌での調査は、彼らの新たな生態を知ることができる貴重な場所だと感じています。この事実を広く伝えることで、大槌が世界的にも有名な調査海域として認識される日を夢見て、今後も研究に励んでいきたいと思っています。

大槌カメラ班調査中の図（阿部貴晃氏提供）。



調査船「弥生のつばやき」ラグビーW杯2019日本大会



国際沿岸海洋研究センターの調査船「弥生」と申します。皆様のご支援による竣工から早4年が経ちました。私の業務は沿岸海域の調査・観測ですが、事務室のびーちゃんの後を受け、このコーナーも担当しています。

年が明けて早ひと月。今年は平昌五輪、サッカーW杯ロシア大会など、大きなスポーツイベントが目白押し。どれも今からワクワクしていますが、もっと楽しみなのは、遂に来年に迫ったラグビーW杯日本大会です。観客動員数で夏季五輪、サッカーW杯に次ぐ世界三大スポーツイベントの一つが、ここ大槌湾に面する釜石・鶴住居地区の会場で行われるのです。大会の成功、日本代表の活躍はもちろんですが、国内外から大勢の人々が大槌・

釜石を訪れ、三陸被災地域が大いに盛り上がることを切に願う今日この頃です。

そのスタジアム建設も含めて、様々な復興関連事業は、ラグビーW杯を一つの目標として「2019年」を合言葉に進められてきました。来年、復興関連事業・W杯が終われば、関係者や観光客は街から出ていき、街は本来の姿に戻ります。街としては、その後こそが勝負どころ。2019年はW杯の年、そして、真の復興・再生に向けて船を漕ぎ出す年となるのか

もしれません。



防潮堤と水門の隙間から見える建設中のスタジアムとJR釜石駅に設置されたカウンタ。建設工事の音は、来年、試合の歓声に変わります。

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

総長室だより

第7回

～ 思いを伝える生声コラム～

東京大学第30代総長

五神 真

「知のプロフェッショナル」とは？

今回は「知のプロフェッショナル」について改めてお話ししたいと思います。この言葉は、2015年に総長に就任し、これからの東京大学はどうあるべきか、そしてそれを担う学生にどんなメッセージを伝えるべきかを検討する中で生まれました。「知識」や「知恵」ではなく「知」を選んだのは意味に広がりを持たせたいと考えたからです。知の創造に能動的に関わることに加えて、知をもって人類社会に貢献することまでも射程にいれてプロフェッショナルという姿をイメージしたのです。学生には、自らの行動に責任を持ち、知を通じて多様な人々と協力しながら社会課題の解決に貢献する人材に育って欲しいと期待しています。

こうしたメッセージは繰り返し伝えることが大切だと感じた出来事がありました。私は昨年5月に著書『変革を駆動する大学』を出版しました。その数か月後、駒場の1、2年生10数名と、この本の内容や知のプロフェッショナルについて語る機会がありました。その時、ある学生が、「知のプロフェッショナルと言っても、自分は研究者になるつもりで東大に来たわけではないのでピンとこない」と述べたのが印象的でした。この学生は知のプロフェッショナルは研究者のことを指していると感じたのでしょう。

しかし、知のプロフェッショナルには、研究者に限らず、知を活用する人、知をもとに多くの人をつなぐ人、社会課題に知をもって対処する人など、様々な姿があります。知との関わり方にもいろんな形があってよいのです。大事なことは、与えられた知識を習得するだけの受身の知ではなく、知に積極的に関わり、新たな知を創造し、様々な人々、地域、社会を繋いで一緒に行動できる人物を目指すことです。これを繰り返し学生に伝えていきたいと思っています。

「知」という広がりのある言葉を使った意味はもう一つあります。自分なりの「知のプロフェッショナル」とは一体何かを、学生自身でも考えて欲しかったのです。私はこれまでの教員生活で、ある言葉を聞いた学生が自分なりにその意味をじっくり考え、予想以上のアウトプットを出すのを何度も見てきました。高い知力と志をもって東大の門を潜った学生たちには、言葉を自分なりに噛みしめ深めてほしいのです。それが知に積極的に関わることだと思うのです。

東大という場をどう活かして「知のプロフェッショナル」となるか、学生一人一人が自ら見出せるようサポートしていきたいと考えています。(つづく)

シリーズ 第11回 連携研究機構

次世代ニュートリノ
科学連携研究機構

の巻



話／機構長
梶田隆章先生

「ハイパーカミオカンデ計画」を推進

——宇宙線研究所、カブリ数物連携宇宙研究機構、理学系研究科の連携による研究機構です。

「はい。10月1日に発足し、11月8日に神岡宇宙素粒子研究施設で発足式を行いました(下写真)。ニュートリノ科学の未来を開拓し、「ハイパーカミオカンデ計画」を進める使命を担います。陽子崩壊や、ニュートリノのCP対称性の破れの発見などが、素粒子の統一理論や宇宙史の解明に役立つことを期待しています」

——「超」(super)をさらに超える「極超」(hyper)のカミオカンデとは、どんなものなのでしょうか。

「スーパーカミオカンデ(SK)より約10倍感度がよい検出器です。円筒形タンクは直径74m深さ60m。体積は26万tでSKの約5倍、解析に使う有効体積は19万tで約10倍です。SKで1.3万本ある光電子増倍管は、ハイパーカミオカンデでは4万本になります。場所はSKがある池の山から8kmほど南に位置する二十五山の地下650m。神岡鉱山の本拠というべき山です。ここを候補に地質調査を始めてもう10年以上になります」

——3つの部局はこれまでも連携してきましたよね。

「はい。今回は非常に大規模な計画で、3年前に文部科学省から、宇宙線研単独では難しい規模ではないかと提言をいただきました。連携研究機構という新しい枠組みができたので、これで「オール東大」体制を実現しようと決意しました。ハイパーカミオカンデ計画始動の際、連携研究機構がホストとなることで多くの皆さんに当事者意識を高めてもらえると考えています」

——計画は今後どんな予定で進むのでしょうか。

「すでに今夏、文科省の「大型プロジェクトの推進に関する基本構想ロードマップ2017」に載りましたので、あとは地道に準備を進めるだけです。来年度から建設を望んでいましたが、概算要求に入らなかったため、2019年度の開始を目標に再設定しました。まずは運営委員会を立ち上げ、組織としての体を整えます」

——機構名を略したい場合は何と呼びますか。

「英語名のNext-Generation Neutrino Science Organizationの頭文字をつなげて「NNSO」と呼んでいるようです。今年1月、飛騨市と宇宙線研が連携協定を結びまして、地元の皆さんが支援を表明してくれています。オール東大の一員として、教職員の皆さんにも温かい支援をいただければ幸いです」



www.nnsou.tokyo.ac.jp/

UTokyo バリアフリー最前線!

第6回

ことだまくん



支援と医療

バリアフリー支援室准教授 垣内千尋

これまで5回にわたって障害者差別解消法施行に伴う東京大学におけるバリアフリー支援について紹介してまいりました。このテーマについては今回が最終回となります。バリアとは障害のある方々をとりまく社会的障壁のことであり、障害そのものではありませんが、障害を医療的側面からも理解することは、より適切な合理的配慮へつながる一助となるものと考えます。今回は支援と医療について、精神的なことを例に少し考えてみたいと思います。

精神科の対象とする疾患や障害においては、同じカテゴリーとされる障害であっても、症状や治療への反応性、また、生活における困り事の内容は様々です。ご本人の社会や生活背景、価値観などから、医療に対するニーズそのものも多様で、その中で医療の関わるところを悩みつつ、治療をすすめていくこととなります。医療と同様に、ご本人の個性や能力を發揮する環境の構築にはどのような支援が必要か、ということも人それぞれです。たとえ同じ方であっても、治療経過におけるその時々々の状態、また、本人をとりまく環境に応じて、必要な支援の内容は変わっていきます。病状によっては支援の相談以前に、治療を最優先とすることが必要となる事もあるでしょう。そのような状況で適時に適切な支援を進めるには、刻々と変化する状態に対する医療的アセスメントを十分にふまえる必要があります。医療者と支援者の連携が大切になります。

診察室の中では時にご本人の実際の生活や、どのような支援が適切なのかをうまく想像できないこともあります。一方で、私自身は支援の現場に参りましてからの日は浅いですが、支援を考えていく際に医療的状況の把握が重要であることを改めて感じることがあります。障害者差別解消法の施行を追い風として、さまざまな面からのアプローチにより、さまざまな条件を持つ多様な人がともに学び働くことのできるバリアフリーの東京大学が実現していくことを願ってやみません。



駒場Iキャンパスにあるバリアフリー支援室駒場支所。本郷支所、本郷支所柏分室とともに、障害のある学生、教職員の相談に応じています。

バリアフリー支援室 ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第142回

RELAY COLUMN

薬学系研究科・薬学部
会計チーム(経理)係長

小林 茂

『薬』です



痩せないはずいな……。

薬学部に異動して3年目になります。

私のいる会計チームには内訳みたいなものがあり、(経理)と(研究協力)があります(いつも別々のチームで存在しているんじゃないかって心の中で思っています)。

私は(経理)の方で、チームとしては、予算、決算、給与、謝金、旅費などをやっています。(研究協力)は外部資金全般をやっています。とにかくチーム全体の伝票チェックや決裁書類が自分のところにガンガン回ってきて、1年目は目を通すのが大変でしたが、最近はそれぞれの仕事がわかってきたのと、もしくは一通りわかっているフリができるようになったので3年目にしてやっと慣れてきた感じがします。

私自身の担当で予算、決算の業務があるのですが、こちらに関しては未だに勉強中というか、困りごとに事欠かないというか、失敗ばかりというか……。そんな時は仲良しメンバーでお酒を飲んで気分転換をしています。

最後にチームの皆さんに日々助けられていることや、急なお仕事をお願いしても嫌な顔一つせず(たぶん)やってくれる先生方に囲まれて、とても感謝している今日この頃です。



会計チームの(経理)&(研究協力)のみなさん。

得意ワザ：お酒を飲むと調子こいてしまう

自分の性格：かなり雑

次回執筆者のご指名：山本太さん

次回執筆者との関係：前任者

次回執筆者の紹介：幸せ絶頂期のプロティン大好き男

インタープリターズ・第127回 バイブル

総合文化研究科教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門 **渡邊雄一郎**

多様化とコミュニケーション教育

東京生まれだが父の転勤で三重県の片田舎で小学校の1年生、2年生途中から神戸市に、さらに3年生のときに東京に来て再度転校を経験した。幼い頃であるが同じ日本のなかで小学校での教え方、給食などに違いがあることにショックをうけた。海外でもなく同じ日本国内でどうしてこれだけ違うのか。でも言葉、考え方も違うのが当たり前で、互いに違いを尊重しあえば良いのだと気付いたとき気が楽になった。いま、大学に入って親元を離れる学生も多いが、同じような経験を持つのだろうか。TV、インターネットで情報が飛び交い、移動手段もよくなり日帰りもできる、物流も便利になり、コンビニ、国際的チェーン店で好みのものがいつでもどこでも買える。もしかすると全国各地、世界が画一化された状態が普通と感じてしまっていないか。自分の嗜好がいつでも満たされる感覚の陰で、いま人それぞれの個性の存在を忘れてはいないか。グローバル化の流れとは何か。確かに経済や流通の上では大きく変わったのであろうが、我々の意識はどのように変革したのか。お互いの違いを理解しあえるようになってきているのか。知識などが多様化し、さまざまなステークホルダーの見方の相互理解が重要となっている時代である。相手も同じような考え方を持っていると思ひ込む所がないだろうか。国際的交流や科学コミュニケーションを行う場合に、お互い多様な視点や考え方を尊重し、同じ舞台の上で議論をすること、経験することはこれから重要になっていくと感じる。

推薦入学、留学生など多様な学生を受け入れる仕組みが様々に行われ、キャンパスにも多様性が豊かになってきた。学生として多様な人材を確保することが議論されるが、教員の方は従来の枠で入学した学生と長年関わってきたこともあり、なかなか柔軟な変化対応は難しい。どの学生でも出席したい授業を受講できると良いのだが、類似の内容であっても、言葉の問題や制度上でできないところがある。コミュニケーションを行う授業では、学年、経験や国、言語の違いを多様性として活かした形で実践することは可能にならないだろうか。何を学び、互いに何が得られるのかに答えられれば、多様な主張、言語、能力、学年の違いは乗り越えられないか。お互いのさまざまな文化背景、経験、学術的財産を理解し、われわれが多様な人材に発信ができる場をキャンパス内に広めたいものである。



ペリー来航から165年—今、グローバル化とは？

science-interpret.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! The University of Tokyo Archives 文書館



第12回

収蔵する貴重な学内資料から
140年に及ぶ東大の歴史の一部をご紹介します

五月祭のはじまり

毎年5月に本郷地区キャンパスで開催されている五月祭。五月祭のはじまりはいつだったのでしょうか。

五月祭の起源は、今から95年前、大正12（1923）年5月5日に行われた新入生歓迎会を兼ねた学友会大会の大園遊会です。その当時の写真(↓)を当館所蔵の卒業記念写真帖の中に見ることができず(F0025 史料室アルバム)。この日のことについて『東京大学百



年史 通史二』に、「この日は「午前中は各学部を解放し、従来他学部の者には窺い知られなかった機械や、参考品を一般学生に観覧させて、学生相互の知識の交換を図り」(『学士会月報』四二三号二八頁)、正午から学生大会を開催して学生の自治問題を討議し、午後三時から園遊会に移った……」とあります。この園遊会は現在の御殿下グラウンドで行われました。

大園遊会は大懇親会や全学解放など改称の後、昭和8年開催の第10回からは「五月祭」という言葉が大学新聞上で使用されるようになりました。

毎年行われている五月祭は、今年第91回を迎えますが、過去に4回の開催中止を余儀なくされました。昭和3年（主催者である学友会解散のため）、昭和19・20年（戦時中のため）、昭和44年（東大紛争の影響のため）です。実は、昭和21年にも五月祭と思われる催事が行われており、その様子も『帝国大学新聞』に記事が書かれていますが（5月25・26日に行われた五月祭は講演会、演劇、音楽会、展覧ではアダム・スミス文庫やソ連事情写真展など、7千人に上る来学者があったと昭和21年6月1日の記事にあり）、なぜか回数にカウントされていません。なぜ回数にカウントされなかったのか、その当時の資料やパンフレットがあれば何か分かるかもしれませんが、残念ながら見つかることができませんでした。

当館では五月祭のパンフレットの一部分を所蔵していますが、欠号もあるので、ご寄贈いただけるパンフレットをお持ちの方はぜひ当館までご連絡ください。

(事務補佐員・村上こすえ)



東京大学文書館

www.u-tokyo.ac.jp/history/index_j.html

トピックス 全学ホームページの「トピックス」に掲載された情報の一覧と、その中からいくつかをCLOSE UPとしてご紹介します。

掲載日	担当部署	タイトル	実施日
1月12日 ～2月6日	広報戦略本部	「なぜ」を忘れない。「自分は正しいのか」を問い続ける。／学歴——素直に教育の意義を問い続ける異色の研究者／継続は筋力なり！／人々の話（ストーリー）の中から現代人の死生観や倫理観が浮かび上がる。／好奇心こそが常識を打破し人生を駆動する。／Think Cubic (UTOKYO VOICES)	11月7日～ 12月19日
1月12日	サステイナブルキャンパスプロジェクト室	日本最大級の環境展示会（エコプロ2017 環境とエネルギーの未来展）にTSCP学生委員会が参加しました。	12月7日
1月23日 ～1月30日	広報室	大学と地域のコミュニティを融合させた新時代のスポーツクラブ像を体現／移転の歴史の記憶が重畳する駒場リサーチキャンパス	9月8日
1月24日	低温センター	平成29年度安全講習会（第4回、5回、6回）開催	10月2日～
1月29日	教育学部附属中等教育学校	酒井邦嘉教授特別授業行われる	1月26日
1月29日	男女共同参画室	「東京都女性活躍推進大賞」優秀賞 小池知事から受賞！	1月18日

お知らせ 全学ホームページの「お知らせ」、「イベント一覧」でご案内しているお知らせを一部掲載します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル	URL
1月16日	本部広報課	退職教員の最終講義（2月開催分）	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1304_00044.html
1月30日	国際本部	第4回戦略的パートナーシップシンポジウム～非英語圏に位置する大学における英語の役割～	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0502_00006.html
2月5日	理学系研究科・理学部	第30回 東京大学理学部 公開講演会【星々が開く理学の扉】	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0106_00035.html
2月6日	生産技術研究所	第3回ポスト「京」重点課題8「近未来型ものづくりを先導する革新的設計・製造プロセスの開発」シンポジウム	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0205_00045.html
2月6日	卒業生室	第15回グレーター東大塾「アメリカ」受講生募集中	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0516_00020.html
2月7日	公共政策学連携研究部・公共政策学教育部	第13回ITPUセミナー	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z0116_00058.html
2月7日	高齢社会総合研究機構	IQG/GLAFS 国内シンポジウム「『これからのジェロントロジーを考える』開催のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/events/events_z1914_00008.html
2月8日	卒業生室	オンラインコミュニティ「TFT」に登録するとパーマネントアドレスが取得できます	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z0516_00007.html
2月8日	附属図書館	総合図書館中央部分のサービス再開と臨時休館のお知らせ	http://www.u-tokyo.ac.jp/ja/news/notices/notices_z1901_00005.html



CLOSE UP 「東京都女性活躍推進大賞」優秀賞を受賞!

(男女共同参画室)



小池東京都知事と松木理事・副学長。



贈呈式の記念写真。

東京大学は、平成29年度「東京都女性活躍推進大賞」優秀賞（教育分野）を受賞しました。

1月18日（木）に東京都庁で授賞式があり、小池百合子知事から表彰状と記念の楯が松木則夫理事・副学長に授与されました。

同賞は、全ての女性が意欲と能力に応じて多様な生き方が選択できる社会の実現に向け、平成26年度に東京都が創設したものです。

東京大学の男女共同参画室にかかる加速的取り組みが評価され、優秀賞を受賞しました。主な取り組みは以下のとおりです。

1. 上位職に対する積極的雇用支援

・「女性教員（教授・准教授）増加のための加速プログラム」として、積極的な取組を提案した 部局に対し教授・准教授の

雇用にかかる経費を一定期間支援

2. ライフイベントと研究活動の両立支援

・大学直営の4つの保育園を運営し、ニーズにあった保育サービスを提供
・研究者サポート要員の配置やベビーシッター割引券の発行により両立を支援

3. 女性研究者の育成・キャリア形成支援

・3つの研究支援制度（「スタートアップ研究費支援」「スキルアップ経費支援」「リスタートアップ研究費支援」）により女性教員の研究活動や学会等への参加を積極的に支援
・「女性教員フォローアップ・メンターシステム」や「女性研究者支援相談室」を整備



 CLOSE UP

環境展示会にTSCP学生委員会が参加 (サステナブルキャンパスプロジェクト室)



学生委員会メンバーが参加者に活動を紹介しました。

日本最大級の環境展示会である「エコプロ2017環境とエネルギーの未来展」が、12月7日から9日まで開催されました。本学からはサステナブルキャンパスプロジェクト室 (TSCP室) の構成員であるTSCP学生委員会 (2015年7月発足) の学生達が主となって、当プロジェクトの紹介、TSCP室の取り組み、学生が考えた今後の取り組みなどを広く紹介しました。

本学は、自らの行動によりサステナブルな社会の実現に向けた道筋を作りたいと考えています。このため平成20年4月より「東大サステナブルキャンパスプロジェクト (TSCP)」を全学プロジェクトとして立ち上げ、低炭素キャン

パスの実現を最優先課題として様々な活動を進めています。

今回、展示会を通じて一般の方々、関係機関に広く知って頂く良い機会にもなり、多くの情報交換が出来ました。子供から年配者まで幅広い方が当ブースにお越し頂き、本学の学生達の説明に熱心に耳を傾け、有意義なご意見も多数頂戴致しました。また、学生達にとっては展示準備から説明まで取り組めたことで、大学内では学べない貴重な体験活動になりました。今後も大学の様々な地球温暖化対策と環境配慮を広く紹介する事により、地球温暖化対策への大学の行動を示していきたいと考えております。

 CLOSE UP

平成29年度安全講習会 (第4回、5回、6回) を開催 (低温センター)



島野教授の挨拶。



中村特任助教による講習。

平成29年度低温センター安全講習会 (第4回・10月2日於弥生講堂一条ホール/第5回・10月31日於鉄門記念講堂/第6回・1月18日於理学部1号館233講義室) を開催しました。本郷地区キャンパス内で寒剤を使用する初学者の方や寒剤使用研究室のヘリウムデータ報告担当者・液体窒素容器連絡担当者・寒剤管理連絡担当者に出席を呼びかけ、学生及び教職員など合計190名が出席しました。

講習会では、低温センター島野亮教授挨拶の後、島野亮教授・同村川智准教授による寒剤や高圧ガスボンベの安全な取り扱い方と本郷地区キャンパス内での各種規程や関連法令の説明に続き、同藤井武則助教、同中村祥子特任

助教による寒剤の性質とその応用に関する説明がありました。また、講習会では液体窒素の汲み出しとガスボンベからガスを使用する動画や展示に参加者は興味深く見入っていました。講習会の最後にはミニテストを行いました。

近年、寒剤や高圧ガスに関する学内でのヒヤリハット事例が多数報告されていますが、本講習会は高圧ガス保安法で義務付けられている保安教育の一環であり、環境安全本部から本郷地区キャンパス内で寒剤を取り扱う者は必ず受講することが義務づけられています。今後も本講習会を通じて寒剤の安全な取り扱いに一層心がけていきたいと考えています。次回は、2018年春に開催予定です。

 CLOSE UP

酒井邦嘉教授の特別授業が行われました (教育学部附属中等教育学校)



酒井邦嘉教授の特別授業の様子。

教育学部附属中等教育学校において、1月26日、酒井邦嘉 総合文化研究科教授による特別授業が開催されました。「脳と人工知能」をテーマとしたこの授業には、生徒70名、保護者50名、教職員15名が参加しました。

酒井教授は、将棋の藤井聡太4段の活躍に言及し、「藤井4段は、限界の練習 (あと少しだけできるはずと考えて、その限界のさらに上を目指すこと) を10年以上続けたことで、その能力を高めた」と説明されました。また、脳

を創るヒントとして、「生涯に渡る読書や学習の蓄積が脳を創る」ということ、「読書や教育の価値は「効率」ではない」ということなどを説明されました。複数の生徒や、保護者からも質問が出る授業となりました。

酒井邦嘉教授は、本校で毎年特別授業を実施しています。毎回テーマを変えて、高度な内容をわかりやすく説明されており、生徒・保護者・教職員にとって、多くの貴重な知見を得られる場となっています。

 CLOSE UP

退職後も「UTokyo」のメールアドレスが使えます! (卒業生室)

パーマナントアドレスとは「生涯」使える転送専用メールアドレスのこと。東京大学のオンラインコミュニティ「TFT」に登録すると、1名につき1つ、生涯変わらぬメールアドレスを無料で取得できます。利

用資格は卒業生および教職員。卒業生は「XXXX@卒業年.alumni.u-tokyo.ac.jp」、卒業生でない教職員は「XXXX@kk.alumni.u-tokyo.ac.jp」で、@マークの前の部分を自由に決められます。年度末で退

職する教職員も取得可能で、退職後も引き続き使えます。東大との絆をずっと感じられるアドレスを、ぜひこの機会にゲットしましょう。詳しくはwww.u-tokyo.ac.jp/ja/alumni/tft/index.html をご覧ください。



学内外に潜む「差別」に気づき、闘おう

数年前、国立大学の「人文社会系・教員養成系を縮減し、理系へ特化する」方針が発表され、当然ながら世論は炎上、国策当局は慌てて「そういう意味ではなかった」などと火消しに走った。ただでさえ文系予算と理系予算との違いは「単位：千円」と「単位：百万円」だ、などと揶揄される圧倒的予算格差を、更に拡大することに国民的合意があるわけでは勿論ない。国策に批判的な「煩い文系」を排除し、相対的に舌鋒の溫和しい「使いやすい理系」を重用する、という差別的な政策意図は明々白々であった。

現政権下で爆発的に拡大した所謂「軍学共同」にしても、やはり軍事転用しやすい分野・研究を偏重する予算差別である。同じ分野内でも、軍事転用（所謂デュアルユース）を呑めば研究費を受けられるが、それを「良心的拒否」すると資金難を余儀なくされる、という差別が起こる。

労働契約法による無期雇用転換申込権の発生を年度明けに控え、頓に注目を集めた有期雇用教職員問題も、元をただせば「雇止め」など有期雇用ゆえの差別待遇がそもそもの発

火点であった。周知の通り本学は、大多数の国公立大学に先駆け、有期雇用職員の全学一律契約更新上限（旧来は5年）を廃止し、無期雇用転換を促し、雇用安定という労働契約法の趣旨を体現する画期的な英断を下した。しかも教職員・労組側が明示要求していなかったにも拘らず、例えば短時間勤務職員の時給上限を一気に50%以上も引上げ、せつかく無期雇用化した職員の流失を未然防止する良い意味での組織防衛に本腰を入れ始めるなど、法人化後14年にして漸く「企業」としての経営手腕に磨きのかかり始めた感がある。学内外への良き模範となることを希うや切である。

旧態依然たる「資本」対「労働者」かどうかはともかく、「人類史は階級闘争史」なるマルクスの言葉は、2世紀を隔てた現代なお名言であり続ける。我々一人ひとりが学内外・身辺各所に残存する「差別」を掘り起こし、それと闘うことで、将来・次世代の環境は必ずや改善しよう。

佐々木弾
(社会科学研究所)